

遊び観・遊び心と保育・子育て — 東京都下における保護者及び保育者への調査研究から —

Playful Mind and Playful Mood in Childcare and Childrearing — Through Surveying and Research for parents and Childcarers —

瀧口 優 小松 歩*
金田 利子** 山路 千華***

研究
ノート

子どもにとって遊びの持つ意味は大きい。したがって子どもが育つ上で必要な環境には遊びは欠かせない。しかしその遊びをどのようにとらえるのかは人によって違っている。子どもの近くにいる保護者や保育者は遊びをどのように捉えているのか、遊びの背景にある遊び心がどのように育っているのか、子どもの育つ環境づくりに欠かせない要素である。

本調査は、東京都下においてこうした保護者や保育者の遊び観、遊び心に関する思いを聞き出し、子育てや保育にどのように関わってくるのかを明らかにするために行ったものである。

キーワード：遊び心 子育て 環境づくり

はじめに

白梅学園大学・短期大学では、2009年度より地域交流研究センターの立ち上げに伴って「遊びと学びのコラボレーションによる地域交流活性化システムづくりに関する研究—大学附属幼稚園を拠点として—」という研究（文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」）をスタートし、5つのプロジェクトを立ち上げた。その一つが生涯遊び心プロジェクトである。5年間の助成期間を経て、2014年以降も研究を継続してきた。

2017年には遊びによる子どもの育つ地域環境作りⅠ・Ⅱとして日本保育学会第70回大会で報告（小松他：pp.439-440）し、白梅学園大学が主催する「小平西地区地域ネットワーク」に参加する地域づくりに積極的な参加者に遊びや遊び心についての調査を行い、子どもの遊びの場面を温かく見守る一方で、周囲を意識して子どもの心に寄り添えないところもあることなどを明らかにした。

2018年にはその継続として遊びによる子どもの育つ地域環境作りⅢ・Ⅳとして日本保育学会第71回大会で報告（小松他：pp.423-424）し、関東近県の郊外に勤務する保育士に対して遊びについての考え方や子どもの遊びを見守る思いなどの遊び心についての同様の調査を行い、保育経験や年齢と子ども観の関係について調査分析し、保育の経験を積み重ねることによって子ども観が豊かに発展させられることを明らかにしてきた。

2019年は、同様の調査を白梅学園大学・短期大

* 保育科

** 客員研究員 東京国際福祉専門学校
元白梅学園大学教授

*** 客員研究員 白鷗大学

学が位置する K 市の保育者と幼児期の子どもを持つ保護者を対象に2018年秋に行い、その分析結果を日本保育学会第72回大会に行うことになった。本報告はそのまとめである。

1. 研究の目的

本研究は、2018年日本保育学会での共同研究の継続である。前年度の栃木県 O 市の保育士への調査を通じて、遊び心と保育者の子ども観についての考察を行ったことを受けて、地域をかえて東京郊外の K 市において保育者はどのように考えているかを明らかにすると同時に、同じ地域の保護者たちはどのように考えているのかをつかむことが私たちの課題であった。それを踏まえて異なる自治体の保育者の比較、同じ自治体の保育者と保護者の比較を行い、保育や子育てにおいて、「遊び心」がどのように作用するのかをつかむことによって、今後の保育のあり方について検討する機会にしたいと考えた。異なる自治体の比較を行ったのは、保育者が遊び心を持つゆとりが都心部と郊外では異なるのではないかと考えたからである。

なお遊び心の定義については、杉本らが文献研究の中から6つの因子を見いだしている。①「『仕事』との対義語」、②「ゆとり」、③「楽しみ」、④「実践概念」、⑤「コミュニケーション能力」、⑥「『仕事』に活かすもの」(杉本他2008、p.131)。ただしこれらは福祉援助の視点からで、高齢者や障がい者を対象としているものであり、そのまま子どもや保育者に当てはめることはできない。

遊び心について心理学的に取り上げているのが野口節子で、『遊び心の心理学的意義』(2003)の中で「遊び心を持ってことにあたることにより、自由に創造的になることができ、自己発見にもつながってくるのである。遊びは心身を解放するが、遊び心は心を解放するといえるだろう」としている。

本研究では遊び心を杉本らの整理した6つの因子のうちの「ゆとり」と「コミュニケーション能力」を基本ととらえ、遊び心が保育士や保護者の

自己発見につながり、よりよい保育や子育てにつながることができるのではないかと考えた。

2. 先行研究

経済や住宅、環境、文化などに関する「遊び心」の論文・記事は多数あるが、子育てや教育についての論文は少ない。国立国会図書館で「遊び心」を検索すると1044(2019年4月6日現在)を検出するが、その中で教育や子育てに関するものは1989年以降で25例である。

25例のうちで保育や保護者について言及したものは7例のみである。乳幼児期の遊びの重要性については様々論じられているが、「遊び心」となると対象外になってしまう。

乳幼児期における遊びの持っている意味については研究も進んでおり、保育者や保護者の遊び観に関する調査についても研究の数は少なくない。しかしながら「遊び心」という視点になると、上述のように極めて限られたものになってしまう。

3. 方法

研究ⅢやⅣとはほぼ同じ項目で K 市内の私立保育園や幼稚園に調査用紙を配布し、その集計結果を分析することとした。調査については白梅学園大学・短期大学の研究倫理審査委員会の審査を経て承認を得ている。2018年11月に幼稚園2園及び保育園3園に調査用紙を配布し、幼稚園2園(412人)から124(回収率30.1%)、保育園3園(180人)から55(30.6%)の回答を保護者より得た。保育園においては3歳から5歳までの保護者に限定し、幼稚園の保護者との共通性をはかった。また保育者については保護者と同じ幼稚園2園(60人)から26(43.3%)、保育園10園(220人)から90(40.9%)の回答が集まった。なお調査対象であるが、保育園については K 市役所の保育課に依頼して、調査に協力しても良いという回答を得たところに調査用紙を送っている。幼稚園と保育園の違いはあるが、ここでは3歳から5歳に関わる保育者と保護者というくくりで調査した。幼稚園と保育園の

比較については今後の課題である。

4. 結果と考察

(1) 保護者調査について

1) 保護者の年齢

保護者への調査では、回答者は合計で166人、男性が9人で女性が157人である。年齢別の分類は以下の通りである。10代は0、30代の母親が60.3%と多く、それに続いて40代が多い（35.5%）のが特徴である。

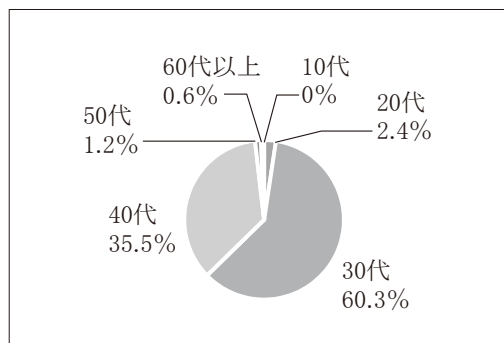


図1 保護者の年齢

2) 家庭における子どもの年齢と人数

グラフでは示していないが、166人の各家庭にいる子どもの年齢は1歳が27人、2歳が28人、3歳が32人、4歳が58人、5歳が98人、小学生が71人、中学生が5人となっている。また家庭における子どもの人数では2人（52.8%）が一番多く、3人いる家庭（20.5%）も少なくない。「ひとり」とほぼ同じ数である。

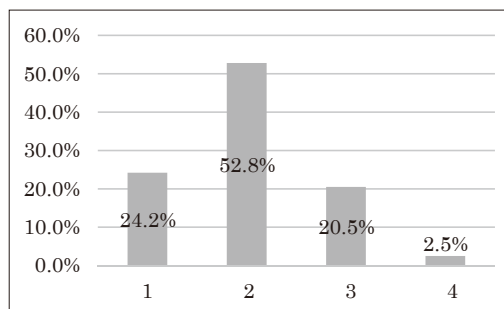


図2 家庭における子どもの人数

1. 1人 2. 2人 3. 3人 4. 4人以上

3) あそびの質問について

遊びの必要性については173人が全員「はい」と答えている。保護者としても子どもにとって遊びが持つ意味を意識していることが分かる。また遊びの本質については「生活そのものである」が48.8%と最も多く、ほぼ半数を占めている（単回答）。

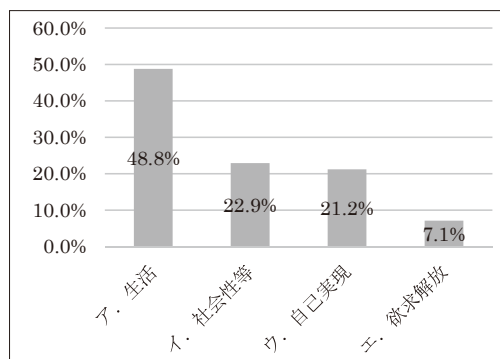


図3 乳幼児にとっての遊びの意味

遊びの本質
 ア 生活そのもの
 イ 社会性、知能、運動能力などを発達させることをねらうもの
 ウ おもしろさを追求する中で自己実現を図る自主的な活動
 エ 乳幼児の欲求を解放するもの

4) 靴並べへの対応

遊んでいる場面の状況について保護者はどのように考えて、どのように反応するのだろうか。「遊び心」については杉本らが定義した6つの因子のうち、保護者や保育者に当てはめると、②「ゆとり」や③「楽しみ」と考えられる。ここでは「遊び心」を麻生が指摘しているように、人間を含めた動物の大人が子どもを微笑んでみる心、つまり何の現実的な意味はないのに、おもしろい（愛おしいを含めて）と思えるところと考えたい。子どもの遊びを見守る心を遊び心と考え、片付けるべき靴を並べて遊んでいる子どもに、どのように対応しようとするのかに遊び心が見えるのではないかと考えた。なお、保護者への調査の結果は、保育者調査の2～3年目の保育者と同様の傾向がある。

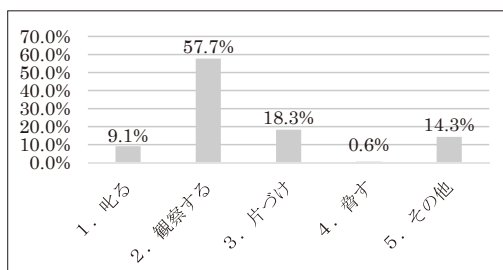


図4 玄関の靴並べにどう対応するか

遊び場面：家の玄関に家族みんなの履き物がばらばらに散らばっていました。ふと見ると、幼児（3、4歳）が靴やサンダルを玄関の床の上などに並べて家族の顔を描き始めました。

自身の対応 ア 何してるの、キタナイ、並べて手を洗ってらっしゃい<叱る>
 イ「おもしろい」と思っで見守るか、一緒にやり始める<観察する>
 ウ おクツはなににするものだったかな、と片付けを促す<片付け>
 エ そんなことするなら、新しいクツは買ってあげないからね<脅す>

保護者達の多くは子どもに寄り添って「観察する」という回答が多かった。設問は観察だけでなく、声を掛けるとか見守るなどの内容もあり、保護者としては意識していることが読み取れる。

更に本当はどうしたいのかという問いかけには「叱る」「観察する」「片付けを促す」がそれぞれ減少し、「その他」が増える。回答の変化としては、前問で「叱る」と答えた人16人のうち「観察する」と回答した数が10人「片付けを促す」が5人である。多くの母親が本来は子どもたちの成長をゆっくりと「観察したい」と思いながら、子どものしつけ等に追われてしまうという状況があると思われる。また初めに「観察する」と答えた101人のうち「その他」と回答した数は41人あるが、そのうちの多くは「片付け」まで考えていると答えている。また「片付けを促す」と回答した人が9人である。この動きの中には子どもの姿をゆっくりと観察しなければということ子どもに対応しながら、しつけから離れられない親の姿が見えてくる。

一方で「片付けを促す」と答えていた32人のうち26人が「観察する」と回答し、「その他」と回答した者が3人となっている。本来はじっくりと

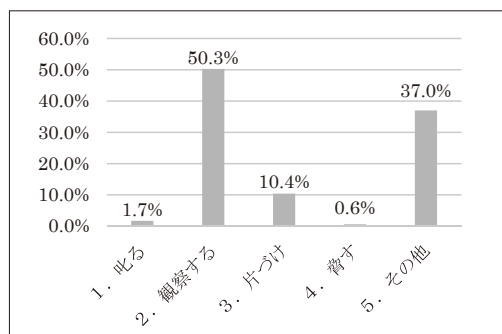


図5 本当はどういう対応をしたいか

観察したいという思いがありながら目の前の子どもに対応しなければならないという動きをしていることがわかる。なお「その他」と答えた25人のうち「観察する」と回答したのが8人である。最初の問いではどちらにするか迷っていたが、本来はと問われて子どもに寄り添うことを選んだと思われる。

この回答結果から見ると、本来は子どもにゆとりをもって対応したいと思っていながら日常の対応が揺れている親の姿が読み取れる。

5) あそび場について

問4では遊び場について聞いている。遊び心との直接の関連はないが、地域や社会が「ゆとり」を失っているという意味で関連があると考えた。

最近都市部では公園に「大きな声を出さないように」という看板等が出されていることについてどう思うか聞いた。記述式なので統計的な数値として出しにくいのが、親の気持ちとして困惑している様子が書き込まれている。中には仕方がないとあきらめている声もあるが、多くはもっと寛容に対応してほしいという声が強い。「腹が立つ」と怒りを持っている親もある。親として声を出しても良い公園まであえて出かけていくという回答も複数あった。

ただK市は東京の都心から1時間程度離れているので、まだまだ実際に「怒られた」というような機会は少ないようである。

「地域の公園の役割の変化」については多くの記述が、子どもが自由に遊べる場が少なくなって

きている中で、役割の重要性を主張する声が多い。特に現在は遊び場が屋内に限られてきてしまっている、屋外で自然の中で遊ぶ事の重要性を感じているという回答が多い。

「地域における子育てと遊び」についての意見では、子どものあそび場にお金がかかるようになってきていることへの不満や不安、大人と子どものコミュニケーションを豊かにする遊びや遊び場の不足、子どもが自由にのびのびと遊べる公園の必要性、子どもだけでなく大人も遊びを知らなくなっている、遊びを教えるところが欲しいという声も少なくない。

6) 保護者調査のまとめ

(2) において K 市における保育者の遊び観について同じように聞いているが、保護者として実際は子ども達とゆとりをもって接したいと思いつながら、とにかくその日を過ごしているという姿が見えてきた。たとえ遊び心があつたとしても、親としての立場、子どもを監督するという立場からその遊び心を表現しにくいということもあるようである。

しかし一方では、多くの保護者たちが「おもしろい!」と思って、見守るか、声をかけるか、あるいは一緒にやり始める」と答えている。これは保護者の中に、環境さえ保証されれば子どもの発達を踏まえた対応ができることを示していると言える。

(2) 保育者調査について

調査対象園の保育者総数は不明であるが125名から回答を得た(幼稚園26名、保育園99名)。女性104名、男性12名、不明9名で、年齢内訳は20代52名、30代25名、40代25名、50代14名、60代以上5名、不明4名で20代の割合が高かった。経験年数は表1のとおり。

表1 回答者の保育経験年数

経験年数	初任	2～5	6～11	12～21	22～30	31～47	不明	計
人数	8	39	23	33	9	5	8	125
割合	6.4%	31.2%	18.4%	26.4%	7.2%	4.0%	6.4%	

今回は以下2つの設問に対する回答をO市との比較も含めて考察する。①遊びの本質の理解(遊び観)、②社会的常識に馴染まないように見える遊び場面に遭遇したときの対応。

1) 遊びの本質の理解(遊び観)

図6は保育者の年齢別にみた遊び観の違いである。図より、全体としてア「生活そのもの」が多いこと、イ「社会性などを発達させることをねらうもの」の割合は、20代は約20%と他の年齢群に比べて高いこと、またウ「おもしろさを追求する中で自己実現を図る自主的な活動」は年齢とともに割合が増え、50代ではアとウが僅差となり、60代以上では逆転する。O市の調査でも、アとイの年齢別変化はほぼ同じであるが、ウ「おもしろさ」の回答には差がみられる。O市ではウの割合は20代ではア、イよりも低く、その後年齢が上がるにつれて増えるものの30%程度なのに対し、K市では20代でもイの割合よりも高く、他の年齢でもO市よりも高い割合となっている。

図7は保育者の経験年数別にみた遊び観の違いである。どの経験年数群もア「生活そのもの」の割合が高い。また、初任者の回答はアとイ「社会性などを発達させることをねらうもの」のみであるが、2年目以降、経験年数を増すにつれイの割合は減少し、逆にウ「おもしろさを追求する自主的な活動」が40%程度まで増える。O市では初任者でもウの回答が20%程みられたが、逆に2～11年の群ではウの割合は20%に満たず、イよりも低かったことと対照的である。

「遊びの必要性」については全員が必要と回答したが、自由記述の内容をみると「遊びは子どもにとって生活そのもの」「子どもはあそびの中で学んでいる」「考える力、ルール、人間関係など様々な事を学ぶ機会がある」「何よりたのしいと思える主体的な活動が遊び」など、理由は多様である。「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の改訂内容を保育所保育指針でみると「指導」から「援助」へ、「環境による保育」「子ども中心」(1990)、「遊びによる保育」(2008)「非認知能力」(2018)など

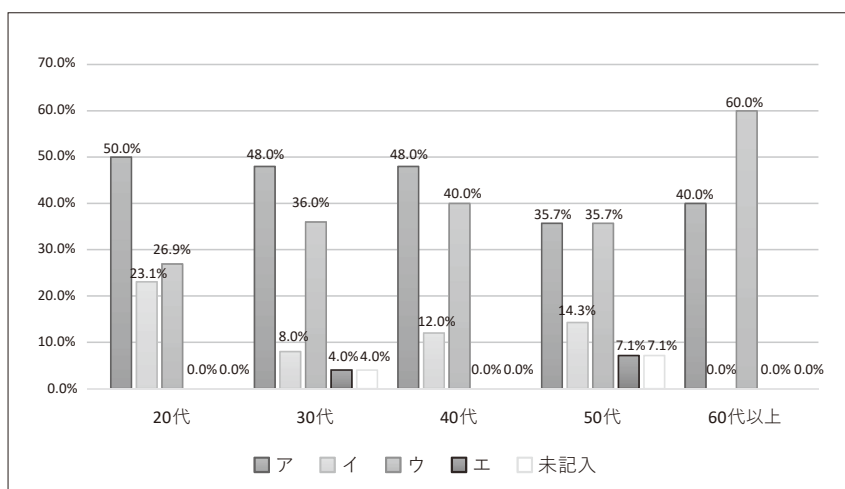


図6 年齢別遊び観の違い

遊びの本質 ア 生活そのもの

イ 社会性、知能、運動能力などを発達させることをねらうもの

ウ おもしろさを追求する中で自己実現を図る自主的な活動

エ 乳幼児の欲求を解放するもの

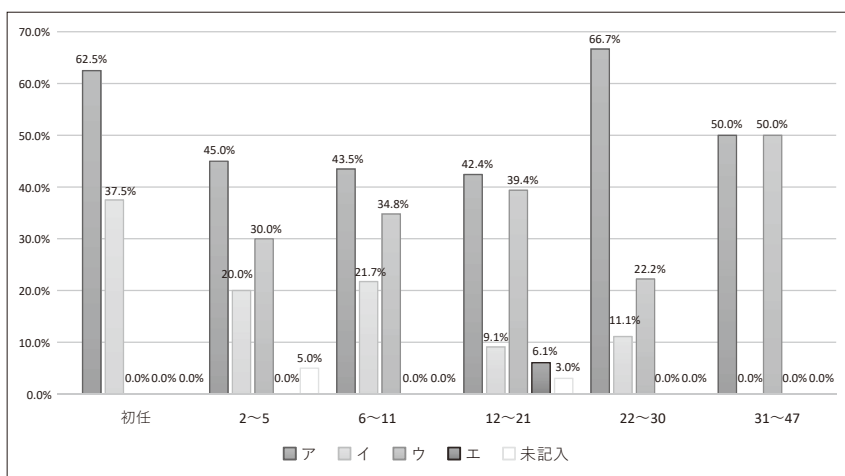


図7 保育経験年数別遊び観の違い

がキーワードとなる。経験年数により養成課程も異なるが、「遊び観」をどのように育むかは実際の保育実践が影響していると考えられる。

2) 大人の社会的常識には馴染まないように見える遊び場面に遭遇したときの自身の対応

図8、9は下記のような遊び場面での対応（よくしがちな対応と、本当はこうしたい対応）を経験年数別に示したものである。

初任者を除くどの経験年数の保育者も、よくしがちな対応は、イ「おもしろい」と共感する回答

が50%を超えもっとも多いのに対し、初任者はウ「片付けを促す」が、よくしがちな対応、本当はしたい対応ともにもっとも多い。また本当はしたい対応で、ア「手洗いを促す」が見られるのも初任者が多い。O市では、どの経験年数群もイが多かったことと比べても、初任者の回答は異なっている。

自由記述をみると、初任者はイ「靴から家族顔をつくることを連想するおもしろさを大切にしたい。最終的に元に戻せばいい」という回答もある

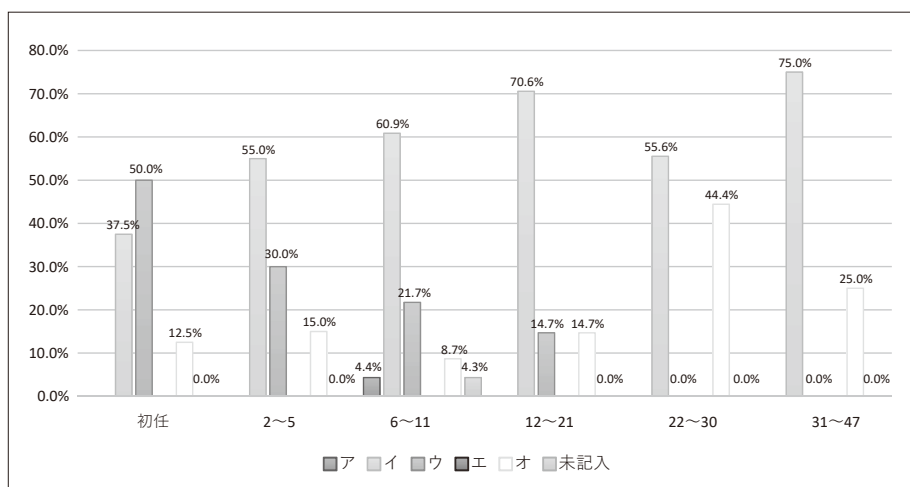


図8 よくしがちな対応（経験年数別）

遊び場面：家の玄関に家族みんなの履き物がばらばらに散らばっていました。ふと見ると、幼児（3, 4歳）が靴やサンダルを玄関の床の上などに並べて家族の顔を描き始めました。

自身の対応
 ア 何してるの、キタナイ、並べて手を洗ってらっしゃい
 イ 「おもしろい」と思って見守るか、一緒にやり始める
 ウ おクツはなにをするものだったかな、と片付けを促す
 エ そんなことするなら、新しいクツは買ってあげないからね
 オ 未記入

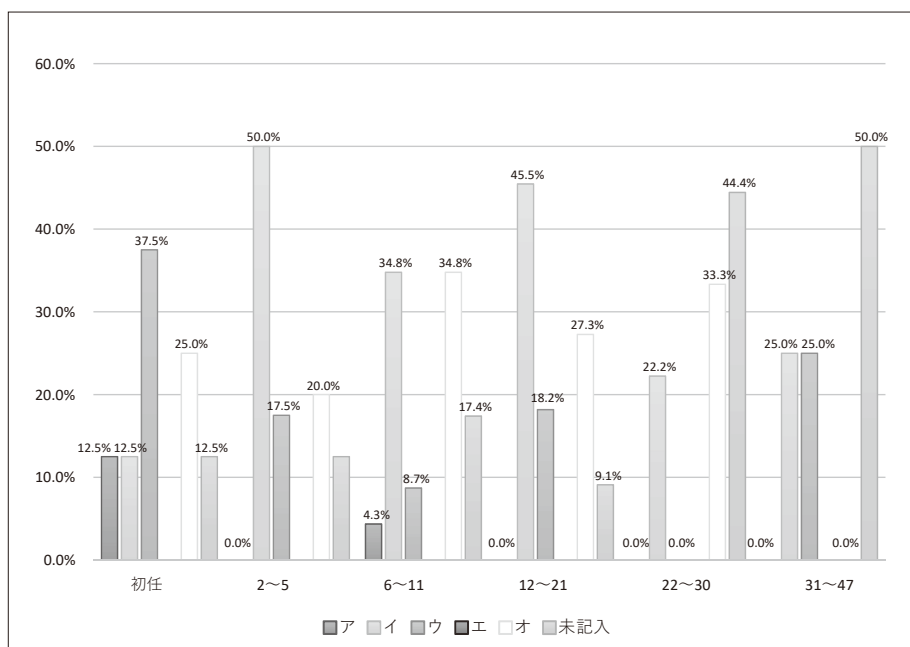


図9 本当はこうしたい対応（経験年数別）

遊び場面：家の玄関に家族みんなの履き物がばらばらに散らばっていました。ふと見ると、幼児（3, 4歳）が靴やサンダルを玄関の床の上などに並べて家族の顔を描き始めました。

自身の対応
 ア 何してるの、キタナイ、並べて手を洗ってらっしゃい
 イ 「おもしろい」と思って見守るか、一緒にやり始める
 ウ おクツはなにをするものだったかな、と片付けを促す
 エ そんなことするなら、新しいクツは買ってあげないからね
 オ 未記入

が、ウ「まずは見守り、その後片付けを促す」「遊ぶものではない」「くつの正しい使い方を知って欲しい」などが多い。他の経験年数群では、イ「楽しいこと、面白いことをしている」「子どもの価値観を大切にしたい」「発想の豊かさに敬意を払う」「くつをくつとして使うのは大人の発想。こういう子どもの発想を面白がりたい」等の回答が多い。一方で、ウ「その場では「片付けて欲しいと思えそう」「玄関は遊ぶ場所ではない」「くつはおもちゃではない」等、しつけなどの観点もみられた。

3) 保育者調査のまとめ

今回調査したK市の保育者は、子どもへの対応が年齢ごとに「見守り」割合が高く、前回調査のO市と比べると全体として「おもしろい」と対応する回答の割合が多く、「遊び心」を持っていると考えられる。ここで言う「遊び心」とは子どもに対する「ゆとりの気持ち」ともいえる。

2018年施行の「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「認定こども園教育・保育要領」では「遊びによる保育」だけでなく、「主体的・対話的で深い学びの保育」の実践や「非認知能力」をどう育むかが求められている。自由記述をみると、保育者はこうしたことを意識しながら、子どもの思いを大切に、子ども主体の遊びを实践しようと努力している姿もみえる。初任者は「遊びによる保育」について養成課程で学び、実践しようとしながらも、余裕がなかったり迷いがあったりすると考えられるが、個々の保育者が考えている事を共有しあい、認め合う関係が深まれば、初任者もよい影響を受け、各園でのよりよい実践につながると思われる。

全体的な考察とまとめ

「あそびによる子どもの育つ地域環境作り」において、乳幼児の子どもたちにとって「あそび」は重要な意味を持つということは保育者にとってもまた保護者にとっても認識されている。しかし実際にはその遊びの環境が保証されていない現実があり、自由記述の中には遊びの環境を確保する

のに経済的な負担が大きくなっていることの不安なども出されている。今回の調査ではこの問題を明らかにする設問とはなっていないので、これ以上触れられないが、大きな課題であろう。

一方子どもの遊びを見守る立場からは、子どもの発想や創造性を大事にしたいという思いが出され、限られた中でもそれを子どもたちとの関係の中で実践しようとする姿、あるいはしたいという姿が見えてきた。そのキーワードとして「遊び心」がある。

今回の調査では、保育者が実践を通して学習や経験を積む中で、子どもの発達を理解し、遊び心を持てるようになることで保育者としての力を付けていくということが、昨年の調査に加えてあらためて確認されたと同時に、保護者も遊び心を持つことで、子育てにゆとりを持ち、子どもの発達を支援する立場にたつことができるのではないかということが見えてきた。回答をしてくれたK市の保護者の遊び心は、保育者の2年から5年経験者に近いということがデータで示されている。その意味することや背景についての分析はこれからである。

子どもの周辺にいる大人が豊かに遊びを知っているだけでなく、子どもたちにゆとりを持って遊びの心を表現していくことが必要ではないか。合わせてどのような場面で大人たちがその遊び心を発揮したら良いのか、それを追求するのが課題である。

<参考資料・文献>

- ・麻生武 2007『発達と教育の心理学』 培風館
- ・大前研一 1991『遊び心』 新潮社
- ・かこさとし 1995『よるですよ あさですよ』 福音館書店
- ・加古里子 1999『絵本への道』 福音館書店
- ・加用文男 2016『子どもの「お馬鹿行動」研究序説』 かもがわ出版
- ・河崎道夫編 1983『子どものあそびと発達』 ひとなる書房

- ・古川潤子・杉本豊和・西方規恵・草野篤子
2009 「福祉援助における「遊び心」導入実践の意義」 白梅学園大学 短期大学教育福祉研究センター研究年報 No.14
- ・小松歩・瀧口優・山路千華 2018 「遊びによる子どもの育つ地域環境作りⅢ」 日本保育学会第71回大会発表要旨集
- ・汐見稔幸・加用文男・加藤繁美 2001 『これが僕らの新・子どもの遊び論だ』 童心社
- ・下山田裕彦・結城敏也編 1991 『遊びの思想』 川島書店
- ・杉本豊和・柴生田美里・西方規恵・草野篤子
2008 「福祉援助への応用を目的とした「遊び心」概念の整理」 白梅学園大学 短期大学 教育福祉研究センター研究年報 No.13
- ・野口節子 2003 『遊び心の心理学的意義』 医学出版社
- ・初見健一 2013 『子どもの遊び黄金時代』 光文社
- ・藤本浩之輔 1974 『子どもの遊び空間』 日本放送協会
- ・守屋毅 1984 『日本人の遊びごころ』 PHP
- ・山路千華・金田利子・小松歩・瀧口優 2017 「遊びによる子どもの育つ地域環境作りⅡ」 日本保育学会第70回大会発表要旨集